

国連「E S Dの10年」後の環境教育
推進方策懇談会

第1回会合

平成26年1月30日（木）

環境省総合環境政策局環境経済課

国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策懇談会 第1回会合

1. 開催日時 平成26年1月30日(木) 13:00~14:58

2. 開催場所 環境省 22階 第1会議室

3. 出席者

北川 知 克 座長
阿部 治 委員
川嶋 直 委員
さかなクン 委員
実平 喜好 委員
関 正 雄 委員
棚橋 乾 委員
小川 雅 由 委員(長手代理)

環境省

総合環境政策局長
大臣官房審議官(総合環境政策局担当)
総合環境政策局総務課長
総合環境政策局環境教育推進室長(含民間活動支援室)
自然環境局総務課自然ふれあい推進室長

文部科学省

国連大学

4. 議 事

1 開会

2 議題

1. 国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策について

- (1) 環境省のE S D取組状況等
- (2) 有識者からのE S Dに関する発表
- (3) 意見交換

2. その他

3 閉会

5. 配付資料

資料1 国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策懇談会第1回会合 出席者一覧

資料2 持続可能な開発のための教育（E S D）の10年について

～環境省における取組～

資料3 各委員からの提出資料

- (1) 阿部委員
- (2) 小川委員
- (3) 川嶋委員
- (4) 小澤委員
- (5) さかなクン委員
- (6) 実平委員
- (7) 関委員
- (8) 棚橋委員

資料4 国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策懇談会（第1回）

討議のポイント

資料5 今後のスケジュール（案）

（参考資料） 国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策懇談会開催要領

午後1時00分 開会

○吉田室長 それでは、定刻となりましたので、ただいまから第1回環境教育推進方策懇談会を開催いたします。

本日の出席者のご紹介をいたします。

さかなクンがもうすぐ着かれるようですが、まず、座長の北川環境副大臣でございます。

続きまして、阿部委員です。

続きまして、川嶋委員でございます。

続きまして、実平委員でございます。

続きまして、関委員でございます。

続きまして、棚橋委員でございます。

続きまして、さかなクンです。

それから、本日、小川委員が欠席ということで、代理で長手様においでいただいております。

続いて、環境省事務方の出席者のご紹介をいたします。

清水総合環境政策局長でございます。

鎌形審議官でございます。

上田総合環境政策局総務課長でございます。

中尾自然環境局自然ふれあい推進室長でございます。

そして、私、環境教育推進室長の吉田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

このほか、オブザーバーとして、文部科学省、国連大学からも出席いただいております。

また、あいち・なごや、それから、岡山市の支援実行委員会からも傍聴においでいただいております。

それでは、懇談会の開会に当たりまして、座長であります北川環境副大臣からご挨拶申し上げます。

○北川座長 今日は、忙しいところ、誠にありがとうございます。環境省のほうまで足を運んでいただきまして、重ねて感謝を申し上げます。

各先生方、委員の皆様方には、環境を含め、それぞれの分野でご活躍をいただいております。その中で大変多忙な中で時間を割いていただき、今後、この会も何度か開催をさせていただいて、先生方の貴重なご意見を賜ればありがたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いをいたします。

各委員の皆様方も、この環境の問題については非常に造詣が深いわけでありまして、地球温暖化問題を初め地球規模の環境問題、また、里山や、今年、法改正をいたしますが、鳥獣、こういう身近な我々の生活の上に根差した環境の問題、ごみの問題、さまざまな課題があります。一つ一つはもう待ったなしの状況で、取り組まなければならない課題であるわけでありまして、こういう問題を解決をしていくには、根本的に我々一人ひとりの意識の改革といえますか、環境に対する気持ち、こういうものを国民の皆様にしっかり持っていただくことが重要であるという思いであります。そのためには、これからの未来を背負っていく子どもたち、こういう子どもたちに、幅広い意識の中で、環境、そして社会を考えていただく。そのためには、やはりこのESDという、こういうツールの中で解決をしていくことが必要だなどという思いでありまして、今年の秋に岡山と愛知でこのESDの世界会議があるわけでありまして、それに向けて、環境省としても、文部科学省と協力をして、この大会を成功させたいという思いと同時に、この「ESDの10年」が、この秋で終わることなく、今後とも継続的に中身が充実をし、また、世界の人々にも、こういう機会を通じて、ユネスコの機関も通じ、あらゆる機会の中でこのESDという発信を続けていくことが、環境問題を根本的に解決をしていくことだという思いを、我々環境省としてもいたしておりますので、ぜひ先生方の今後の議論の中で、これまで培ってこられました知恵や知識また経験があろうと思います。そういうものを披瀝をしていただいて、より充実をしたESDのこの秋の世界会議を迎え、今後の方策に役立てていきたいという思いでありますので、ぜひその点をお願いを申し上げ、今後、NPOを初めいろんな団体があると思います。そういう方々の意見も機会があればお聞かせを願えればと思っておりますので、ぜひその点も重ねてお願いを申し上げまして、冒頭に当たりましての私からのご挨拶とさせていただきます。、どうぞよろしくをお願いをいたします。

今日は、誠にありがとうございます。

○吉田室長 ありがとうございます。

それでは、議題に入ります前に、配付資料の確認をさせていただきます。議事次第の下に配付資料一覧が載っています。資料1として出席者名簿。資料2として、環境省における取組。それから、資料3が各委員からの資料になりますので、ちょっと大部になりますが、3の(1)から(8)まで、資料を配付させていただいております。それから、資料4といたしまして、この懇談会の今回の討議のポイント資料をお配りさせていただいております。それから、資料5として、今後のスケジュール。参考資料として、この懇談会の開催要領ということでございます。もし足りないものがあれば、事務局にお申しつけいただければと思いますので、よろ

しくお願いいたします。

なお、この資料のほかに、あいち・なごや実行委員会、それから岡山市の実行委員会からの資料、それから文部科学省から、メインの席だけなんですけど、ESD QUESTという、小学校高学年向けにつくられたESDの資料を配付させていただいております。このESD QUESTにつきましては、文部科学省のホームページでダウンロードもできますので、傍聴の方はそちらで見てくださいと思います。

それから、各委員のプロフィールにつきましては、それぞれの先生の資料につけさせていただいておりますし、先生によっては中に書き込んでいただいているということでございますので、参考にしていただければと思います。

それでは、ここからの進行は、座長であります北川環境副大臣にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○北川座長 それでは、ただいま事務局のほうから説明をさせていただきましたけれども、中身についての説明、この環境省のこれまでのESDの取組状況につきまして、事務局から報告をさせていただきます。先生方には、釈迦に説法かもしれませんが、一応我々のこれまでの取組をお聞きをいただきまして、なおかつ、先生方のご意見を賜ればありがたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

○吉田室長 それでは、ご説明させていただきます。

資料2でございます。持続可能な開発のための教育(ESD)の10年についてということで、環境省における取組でございます。

1枚おめくりいただきまして、1ページでございますが、このESDについてということでございます。ESDというのは、「持続可能な開発のための教育」ということでございまして、「一人ひとりが世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動を変革するための教育」という位置づけでございます。右に図がございしますが、イメージとしてはこのようなもので、環境教育以外にも、ESDというのはいろいろな方面につながりがあるということでございます。

1枚おめくりいただきまして、これまでのESDの10年についての経緯が書かれてございます。まず、2002年でございますが、9月のヨハネスブルグサミットで、日本政府からこのESDの10年というのを提案いたしました。当時、小泉総理が演説をしたということでございます。その年の12月の国連総会で、「国連持続可能な開発のための教育の10年」が満場一致で決議されました。これはUNDESDということで、「United Nations Decade of Education for Susta

inable Development」でということになっております。2005年の1月からの10年間がこの「ESDの10年」ということになっております。国連での動きもございますが、その後、日本国内におきましても関係省庁連絡会議が設置され、国内実施計画が決定されております。

また、2008年(平成20年)ですが、「ESDの10年」の円卓会議が設置されて、その中でいろいろな主体からご意見をいただきながら、その意見交換等を実施したということがございます。

また、中間年ということで、2009年にはESD世界会議がボンで開かれまして、ここで2014年に日本で国際会議を開催するということが決まったということがございます。

その後、一昨年のリオ+20の成果文書でも、2014年以降も持続可能な開発を教育に統合していくということが明記されているところでございます。

ということで、ESDの10年の最終年である本年11月にユネスコ世界会議を開くということがございます。日程は3ページにございますとおり、岡山でステークホルダーの会議と、それから、愛知・名古屋で閣僚級の会合、全体の取りまとめがあって、その後、フォローアップ会合をやるという予定にしております。環境省といたしましては、岡山で開催されます持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議、これは国連大学がやっておりますが、これは環境省からの拠出金で運営されておりますが、これを支援していきたいということと、それから、名古屋の会議では、サイドイベント等で発信をしていきたいということを考えております。ユネスコの世界会議でございますので、政府の窓口というのは文部科学省ということになっております。

1枚おめくりいただきまして、環境省で行っておりますESD関連施策、私どもの室でやっている施策の主な取組の内容ということで掲げさせていただいております。一つは「+ESDプロジェクト」の運営、それから、学びあいフォーラムといったようなことをやっております。それから、右側に行きまして、ESDの実践ということで、環境教育プログラムの作成、実施というようなことをやっております。また、被災地でのESDのすぐれたプログラムを推進しているということもやっております。さらに、小中学校の先生や、環境NPOのリーダーを対象としまして、環境教育のノウハウの研修事業もやっております。また、開催地の支援ということも当然ですし、国内外の連携ということで、先ほどお話しした地域拠点の認定というもの、それから、アジア太平洋地域のESDに取り組む高等教育機関のネットワークの運営——ProSPER.Netと呼んでおりますが——これも環境省の拠出金で国連大学が開催しております。

その次に、参考資料として、それぞれの事業のパンフレット等をつけさせていただいております。参考資料1が+ESDプロジェクトのパンフレットで、裏を見ていただきますと、「E

SDの視点で捉えてみてください」ということで、6つの概念と7つの能力ということが書いてあります。こういったもので、ESDの取組というものの判断というか、そういったものの参考にしていただきたいと思います。と思っています。

それから、参考資料2として、この2月22日ですが、ESD学びあいフォーラム、ESDキッズフェスということで、これは企業、NPO等の環境保全活動や体験活動に子どもが参加して、それを子どもたちから発信してもらおうというようなイベントを開催予定でございます。

1枚めくっていただきまして、参考3ということで、持続可能な地域づくりを担う人材育成事業ということで、今年度から始まった事業でございますが、全国から20のプログラムを選定しまして、汎用化したものを47都道府県それぞれで、できるだけ学校の授業等で活用していただくということで進めている事業でございます。具体的な結論など、今年度の事業の結果などについては、世界会議でも発信していきたいというふうに思っているところでございます。

1枚おめくりいただきますと、東北でのESDの取組ということで、今年度につきましては、この2月8日に仙台市で発表会を行う予定にしております。

また、参考5ということで、教職員・環境保全活動を担う者に向けた研修ということで、これは平成24年度から実施しておりますが、全国で関東と関西2つ、小学校中学校、それぞれ1回ずつということで、合わせて4回開催しております。文部科学省さんのご協力もいただきまして、各会、応募がたくさん来ているというような状況でございます。

参考6ということで、国際的な取組ということで、先ほどお話ししました地域の拠点、RCEというふうに言っていますが、地域を国連大学が認定するというので、世界中で、今、12カ所、これに加えて国内に6カ所ございますが、こういった取組を推進しています。また、アジア環境大学院ネットワークというものも推進しているということでございます。

簡単ですが、以上で、現在の取組をご報告させていただきました。

○北川座長 ただいま、吉田室長のほうからご説明をさせていただきました、これまでの環境省の取組でありまして、ただいまの説明につきまして、委員の先生方からもし質問があればお受けをしたいと思いますが、特によろしゅうございますでしょうか。

(なし)

○北川座長 それでは、先生方から、委員の皆様方からお話をお聞きをしたいと思いますが、そのお話をさせていただくに当たりまして、事務方のほうから、どういう順番で、どういう段取りといたしますか、順序を踏んで説明をしていただくかということをお事務局から説明をさせ

ていただきますので、よろしくお願いいたします。

○吉田室長 これから、各有識者の委員から提出いただきました資料について説明をいただきます。先ほどお話ししたとおり、資料3として配付させていただいております。配付資料の出席者一覧の名簿順にお話をいただきたいと思っております。ただし、本日、欠席の小川委員、小澤委員の分につきましては、出席委員のお話が終わってからということにさせていただきます。小川委員の代理で出席していただいております長手様よりお話しいただいた後に、小澤委員の資料の説明を事務局からさせていただきます。

懇談会の時間の都合上、各有識者委員のご発言は、一人5分程度でお願いいたします。4分たちましたら、事務局が時間を紙でお知らせいたします。お話しいただく時間が長くなりますと、この後の意見交換の時間が短くなるということになりますので、申し訳ないですが、どうぞ時間を守っていただくようお願いいたします。

また、議論に際しましては、資料4として、討議のポイントというのを配付させていただいております。そういったものも頭に置きながら、ご発言、ご質問いただければというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

○北川座長 ただいま、事務局のほうから説明をさせていただきました。先生方にとりましては、5分じゃとても短いということで、10分でも限りなくお話をしていただければと思うんですが、後ほどの意見交換の時間もありますので、今のルールに従って、ご説明をいただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、阿部委員のほうからお願いをいたします。

○阿部委員 そうしましたら、私のほうから、事務局からいただいたお題は、ESDに関連する自己紹介といたしますか、それと、ポストDESDということだったので、それで、その順でお話をしていきたいと思っております。

私、今、このお手元にパワーポイントの資料があるかと思いますが、冒頭に肩書をいろいろつけました。こんなにいろいろつける必要はなかったんですが、一応ESD関連ということでつけました。まず、上に立教大学ESD研究所というのがあります。所長とありますが、これは2006年に日本で初めてESD研究センターというのを立ち上げまして、今は研究所というふうに名称を変えております。海外を含めた国内外の高等教育を含めたESDのハブ的な活動をしております。

二つ目が環境教育学会ですが、今、会員1,300ちょっとおりますけども、この学会でも、今、会長をしておりますが、ESDは、主要な研究あるいは活動テーマとして行っております。

それから、次は認定NPO法人ESD-J代表理事ということなのですが、これは後ほどお話しします。

それから、次の世界の祭典推進フォーラムも後ほどお話しいたします。

それから、HESD-Jという、これはESDを進めていくための高等教育のフォーラムなんですけれども、これも2007年に立ち上げまして、現在、30大学ほどが組織会員として入っております。

続きまして、めくっていただいて、ここに自己紹介なんですけど、時間が大分たってしまいましたので、ここで、いろいろ私自身、30年以上、環境教育に関わっておるんですが、その過程、プロセスで、「人と自然」という自然に関係した環境教育だけでは、社会の仕組みを変えられないということで、「人と人」、「人と社会」という、こういうような中で、「関係性教育」、「つながり教育」という、いわゆる総合的な環境教育を提唱し、それがまさにESDにつながっていると。

そして、この間、地球環境戦略研究機関のプロジェクトリーダーをやりながら、ESDの研究、あるいは、実際に2002年のヨハネスブルグ・サミットでは、NGOの一員としてこの提案に関わりました。そして、その後、さまざまな活動を展開しております。そして、これを政府のカウンターパートとして進めていくために、このESD-J(持続可能な開発のための教育の10年推進会議)というのを立ち上げております。これはお手元の配付資料で、未来を変える人づくりというのがあるかと思いますが、この一番最後のページに構成メンバーが書かれております。今、このようなネットワークは、世界でも日本にしかありません。

また、今年の世界会合をオールジャパンで進めていこうということで、「ESD世界の祭典推進フォーラム」というものをESD-Jと連動しながら設立しまして、そして、毎年、この環境省、それから文科省さんと一緒に会合やっております、今年8月の中旬に国連大学と共催で行います。

続けて、日本におけるESDの到達点と課題なんですけど、ここに挙げたように、既に到達点については、まさに世界におけるESDの先進地域として、さまざまな活動をしておるということで、その特徴を挙げておきました。実際、今、学校教育は、これは初等から高等教育に至るまで展開されていますが、特に日本の特徴としては、持続可能な地域づくりの一環としてESDが組み込まれていると。従来から行われていた持続可能な地域づくりの中にESDの視点で切り込んでいく。あるいは、新たにそれを進めていくということが始まっていると。

また、連携・協働、これもマルチステークホルダーのアプローチ、これも地域の推進協議

会を含めて、あるいは国レベルにおける省庁連絡会、あるいは円卓会議等を含めて進んでいる。これも日本の特徴であります。

そして、では、課題はどうかということなのですが、課題は、まさにさまざまな活動があるんですが、まだ、いまだ途上なんだと。そして、ばらばらに展開されていると。このままでは、まさにESDの終了、世界の10年が終わった後、失速しかねない。そういう意味で、この失速させないために、今後、ESDを推進していく仕組みづくりが大事であると。ただ、その仕組みづくりは何かというと、ページをめくっていただくと、これが現在の状況です。さまざまな活動がありますが、ばらばらに行っていると。次のページ、提案Aというのがありますが、これらをつないで、さらには、より一層、ESDを進めていく仕組み、例えばESDを「見える化」、「つなぐ化」というのをこの間に行われてきましたが、まさに「見える化」、「つなぐ化」を具体化していく。つまり、ESDのコーディネーターを育成していく。あるいは、地方等で、地域等でESDをやっていく場合、あるいは企業等が進めていく場合のコンサルティングをしていく。あるいはESDの指導法を含めたアーカイブスをつくっていく。さらには、褒める仕組みをつくっていくと。こういったことを含めたネットワークのハブをつくっていくことが必要ではないかと。それは省庁横断、あるいはさまざま現在進めている組織を横断しながらつくっていくことが肝要であるということです。

以上です。5分は短いですね。

○北川座長 ありがとうございます。申し訳ありません。後ほど、また時間のほうはありますので、よろしくをお願いします。

それでは、川嶋委員のほうからお願いいたします。

○川嶋委員 皆様、こんにちは。川嶋です。私は、山梨市の清里というところで、森の中の環境教育をずっとやってまいりました。

1ページですけど、こんな大人たちを主に対象にしてずっと仕事をしてきて、小・中・高校の教育経験はないんですが、一つ、ここに書いていないことで大事なのは、大人はもうだめだからと、未来を担う子どもたちにこそ、環境教育をということたまに聞くんですけど、そんな無責任な言葉を聞く子どもが一体どこにいるんだろうかと。僕は、やっぱり大人に対する環境教育を今後ともずっと続けていきたいと思っています。

3ページです。ESDは教育の方向性を示し、環境教育は教育の内容を示し、〇〇は環境の方法を示すという、「何に向かって」「何を」「どう」教えるか、あるいは学ぶかということが大事だと思うんですけど、この〇〇はというところが、いまだ旧来の教育手法でやる「知

識伝授型」の手法がやっぱり非常に多いというふうに思っています。もっと「参加型学習」とか、学校なんかでは「プロジェクト学習」という言い方をするようですけども、そういうものを普及させていかななくちゃいけないと。

ESD・環境教育が期待する成果は、一体「どれだけ覚えたか」ではなく、私たちの「意識が変わる」こと、私たちの「行動が変わる」こと。言うまでもないですね。この一方的な知識伝授では、意識や行動の変容は非常に難しいだろうと。やはり学ぶ動機と、それから学ぶモチベーションが非常に重要だというふうに僕は思うわけです。

4ページです。環境教育の2つの誤解、これは前も環境省でお話ししたことがあるんですけど、要するに、みんな知らないから行動しないんだと。もう知ったら行動するはずだという誤解、それから、言ったら伝わるという誤解、要するに、知っても行動しない人はたくさんいるわけです。言っても伝わらないことは多いわけですね。企業の中での——今日は企業の方も何人か後でお話があると思いますけども——もう企業の環境部なんかも孤立しているとか、へとへとになっていると。みんな節約しろと、頑張れと、ここが目標だと。言われたほうは、もういいよ、疲れたよと。「脅しの環境教育」ではモチベーションというのは続かない。ESD・環境教育には、このままでは大変なことになるぞという「脅しの教育」が非常に多いんじゃないかなと。そもそも「持続可能な開発のための教育」という言葉が、このまま行ったら持続可能じゃないぞという前提でつくられている言葉かなという感じもします。

6ページです。僕は、やっぱり方法に特化した人材育成のプログラム開発と、ファシリテーター型指導者の養成が必要だと思います。全然新しくない提案ですけども、これが全然できていないということかなと僕は思います。僕らが民間でチャレンジしてきた成果をまとめ、整理して、普及していく必要があるだろうと。教育の「方法」について、徹底的に研究・開発する必要があるだろうと思います。

7ページに行ってください、最近、新聞紙上でも、このMOOCsとか、反転授業という言葉をよく見ます。大規模オンライン公開授業、これは要するに、タブレットとかパソコンで講義を聞くというような、そういうもので、自宅で聞いてきなさいと。あと教室に来たら、みんな質問し合ったり、教え合ったり、議論したり、創造したりする授業にしましょうという大きな動きが世界的にあります。これは我が国でも、要は、いつそれが導入されるかの時間的問題だけで、どうせこうなると僕は思います。どうせということじゃない、多分こうなると。やっぱりそのときに必要なのはファシリテーター型教師なわけですね。教える教師と随分変わってくるわけで、引き出す教師。集まらないと学べない時代というのは確かにあった

わけで、それが、今、ネットの普及で、講義はネットで、それから教室に集まったら、集まったからこその学びの場をつくるということが出来る、必要であると。これはもう環境教育にも当然生かすことができる。

最後ですけども、僕は、8ページですが、「脅しの環境教育」から、やっぱり「希望の環境教育」に変えていかなくちゃいけないと。もうこのまま行ったら大変だぞという脅しからは、もうみんな力は湧いてこないと。あっちへ行こうよと、あのすばらしい未来に向かって、みんなで頑張ろうという、あの絵をみんなで描く。つまり、ESDは「心豊かな未来を描く練習」じゃないかというふうに僕は思うわけですね。みんなでその心豊かな未来をどうやったら描けるんだろうかということを考えるというのが、僕はESDじゃないかなと。もう脅しの環境教育はやめようよと。意識変革と行動変容につながる学び手のモチベーションが上がる、そのためのプログラム開発と、それから、先生の先生、先ほど人材育成できる人の育成をという話をしましたけど、それを徹底的にやるということが、当面の僕たちがしなくちゃいけないことじゃないかなというふうに思います。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

じゃあ、続きまして、さかなクン委員のほうからよろしくお願ひします。どうぞ座ったままで。

○さかなクン委員 さかなクンです。いつも大変お世話になっております。よろしくお願ひいたします。では、座らせていただきます。北川環境副大臣、いつもありがとうございます。ちょっと緊張しております。

日ごろから、環境省の皆様大変学ばせていただいております。これまでも、2005年に行われました7月のチャレンジ25のキャンペーン応援団として参加させていただいてからも、2007年、洞爺湖サミットの成功に向けての重要なテーマであります、地球温暖化防止対策の重要性の普及啓発活動を目的とされた、日本政府・クールアースアンバサダーに就任させていただきまして、そこでもたくさん学ばせていただきました。2005年3月から、ここの9月に行われました愛知万博イベントにも参加させていただいて、地球温暖、生物多様性について学ばせていただけてきました。そして、さまざまな生物多様性のことについて、また、低炭素社会の実現に向けて、どうすればいいのかなど、いろいろ学ばせていただけてきました。

今回つくっていただきました資料3の(5)、このおつくりいただきました資料なんですけれど、去年の暮れに石原環境大臣様とも対談させていただく、大変貴重な機会をいただきました

た。この対談させていただいたことに関しましては、全国の小学生の皆様にご覧いただき「朝日小学生新聞」で簡単に掲載していただきました。やはり環境について、生物多様性についての問題というのは何をしていけばいいのか、また、今どういったことが起こっているのか、こういったことは、やはり研究者の先生方や、北川環境副大臣様を初め、石原環境大臣様にもこのときに教えていただいて、こんなことが起こっているんだ、これはもう自分一人の問題としても抱えるとともに、やはり次世代を担う小学生や幼稚園生、そういった子どもたちにもたくさん知っていただきたいという思いがどんどん強くなっております。

私、さかなクンとしてできることというのは、東京海洋大学の研究者としてお話をさせていただく。あとは、小さいときから絵を描くことが大好きでしたので、絵を描いて、見ていただいて、それで、魚ってこんなにたくさん種類があって、魚の暮らす水の環境というのは、周りの山や森や林があって、その豊かな陸の栄養がしっかりと魚の暮らし、水環境にもつながっていくということを絵でも表現していきたいなど、つくづく思っております。

これからも、ちょっと勉強不足なところが多々あるのですが、先生方にまたこれからも教えていただきながら、小さなお子様とも一緒に考える機会をまたご一緒させていただけたらと強く夢見ております。これからもよろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。

○北川座長 どうもありがとうございました。

じゃあ、続きまして、実平委員のほうからよろしく願いいたします。

○実平委員 東芝の実平でございます。よろしく願いします。

私、実は「ESD」という言葉は、今回のお話に来るまでは存じ上げなかったんでありますね。さらに、その教育についても全くの素人なので、私でいいのかなという気持ちはあるんですけど、これは事務局方の人選ミスということで、お許しをいただければと思っておりますが、私なりにちょっと思い当たる節は、会社生活はもう30年は超えますけども、その半分以上は環境問題、企業で環境問題に取り組んでいるということが一つと、それから、東京商工会議所さんのeco検定の検定委員を5、6年ですか、やっているということからだと思います。実は、今日、eco検定に関する資料をお配りしようと思って、東京商工会議所に送ってもらったはずなんですけど、ちょっとどうも着いていないようなのですが、後でお配りするか、関心を持ってeco検定を見ていただければなというふうに思っています。

それでは、お話をさせていただきます。パワーポイントがございます。

「東芝グループの環境教育・人財育成」と書いてありまして、人財の「財」が、材料の「材」

じゃないので、間違えているんじゃないかということでもありますけども、そうじゃなくて、人は財産であるというところから、この字を積極的に使うようにしているという意味でございます。

2ページ目であります。企業の環境教育の体系ということでありまして、一般教育とISOに関わる教育、専門教育というふうに大きく分けていまして、一般教育ではe-ラーニングをやって、毎年1回、これは全従業員が必ず受けるというふうにやっています。それから、新入社員教育は、新入社員の教育ということであります。ISO14001の教育について、幾つか専門的なことがあるんですが、これも毎年やっています。それから専門教育につきましては、それぞれ必要に応じて、必要な人たちが受けるということで、環境監査員の教育、あるいは環境に適合した設計をするというところの講座、あるいは生物多様性の研修等々やっているとところでもあります。

3ページ目であります。生物多様性リーダー研修の中身を少し書いてございます。最初、生物多様性に関する人財というのは、私どもは電機メーカーということなので、ほとんど誰もいないということなので、外部の人、先生を頼んでやっています。基礎プログラムと応用プログラム、この中で聞いて、実践をして、内部の人を次の機会には講師にするということで、どんどん増やすと、人を増やすというふうなことを展開をしていると。その辺の様子を書いてございます。

4ページ目は、ecoスタイルリーダーというふうに書いてありますけども、東芝グループは、従業員、グループ、グローバルで20万人いるんですね。環境問題を、今いろいろと環境のことをやろうとすると、環境担当だけではうまくいかない。従業員が全員が環境のことを考えるようにすると。環境にいいことを何かをするということでやりたいんであります。そのためには、20万人の1%ぐらいがリーダーになるということが必要なのかなと思っていまして、その2,000人を育成するというプログラムを今走らせていまして、2015年には2,000人にまで持っていきたいなというふうに、そのときに利用しているのが、先ほど冒頭でお話をさせていただきましたeco検定ですね。eco検定を受けて、eco検定に受ければエコピープルとなるわけでありますけども、その人たちはecoスタイルリーダーとして認定をするというふうなことになっていまして、これは5,250円の受験料がかかるんですけども、ちゃんと受けますよといって、受かった方にはそのお金はお出しすると。会社からお金を出すというふうな補助システムをつくっています。

それから、5ページ目は、Webでもいろんな情報発信をさせていただいていまして、環境レ

ポートとかいろんな、エクセレントECPというのは、環境に配慮した製品群の中のエクセレントなもの、世の中に出した時点で、環境性能がナンバーワンであるといったものをどんどん宣伝をして、買っていただくということで、環境負荷の低減に結びつけるというふうな活動をやっています。

それから、6ページ目ではありますが、これは環境レポートということで、1998年からやっております。途中でCSRがはやったころ、CSRの中に環境報告を閉じ込めたというか、入れたという時代があったわけでありまして、なかなかそうすると、紙の数が少なくなっちゃうんで、述べたいことが述べられなくなるということで、また2008年から、CSRは残っているんですけども、さらに環境レポート、単独でも発行するというのを進めています。環境省さんには幾つかの大臣賞をいただいております、ありがとうございます。

それから、7ページ目は、展博ということで書いています。エコプロダクツ2013ということで、この前の12月2日は北川副大臣をご案内させていただいたということでございますけれども、そういったところとか、東芝グループのプライベートの環境展というのを毎年やっているというふうな状況下でございます。

一応時間もございませんので、最後であります。各工場での取組ということで、各いろんな地域ごとに環境の出前授業ということをやっています。小学校、中学校に出向いて授業をすとか、あるいはその真ん中にあるのは環境施設の見学会、逆に工場へ来ていただいて、いろんなものを見ていただいて、学んでいただくと。小中学校、小学校の総合学習等々を利用していただいてやっているということ。それから、インターンシップの受け入れ、これは大学生であります。大学生を毎年、それぞれの工場で2~3人は受け入れていると。こんなこともやっているということでもあります。

以上でご紹介を終わります。

○北川座長 ありがとうございます。決して人選ミスではありませんでして、ESDというのは幅が広いものですから、自然関係だけではなくて、いろんな分野の方々のご意見をいただきたいということでありますので、よろしく願いいたします。

関委員のほうから、よろしく願いいたします。

○関委員 それでは、資料3(7)を御覧ください。クロスリンクというパンフレットが最初についている、白っぽい表紙の資料でございます。具体的な活動内容のご紹介ということで、四つのパンフレットをつけさせていただいております、その最後にプロフィールがありますので、まず自己紹介からお話をさせていただきたいと思っております。

プロフィールの1枚ものの中にありますように、現在、損保ジャパンの身分と、それから同環境財団の身分と、明治大学での教師ということと、三つの肩書を持ってありますが、基本的には、損保ジャパンで、2001年から地球環境部、それからCSR部といったことで、環境とCSRの推進を長年、13年間やってまいりました。その経験から言いますと、まさにCSRというのは、あるいは環境への配慮というのは、企業の本業の中にビルトインする、統合するということですね。本業と一体化するということが求められています。そのために一番大事なことが、まさに社員への浸透ということだと思えますね。そういう意味では、社内への浸透における教育、研修の重要性というのを痛感をしてまいった13年でした。

それから、もう一つ、そのプロフィールの中にISO26000の策定に関わったというのが真ん中辺にあるんですけども、これは先ほど阿部先生の資料の中にもありましたが、社会的責任の国際規格で、この中でもESDというのをうたっております。これはマルチステークホルダー・プロセスで策定した規格です。いろいろなセクター間の連携、その前提として共通認識をきちんと持つ、認識を共有するということがあって、連携して集団的な行動によって、シナジーを生みながら課題を解決していくと。そういうことをめざした規格とっていいと思います。したがって、こういったものをもっともっと広げていきたいなという思いも持っております。

それで、資料のパンフレットのほうに移りますけれども、最初にお配りしたクロスリンクという白い表紙の資料は、損保ジャパンの資料ではなくて、経団連の活動を紹介したものです。これは経団連に自然保護基金及び同協議会という組織がありまして、主に国内外の自然保護のNPO、NGOを資金的に支援をしていくと、こういうプロジェクトを92年以来続けているものでございます。この中で、自然保護協議会の活動もいろいろと進化をしてくまして、先ほどありましたように、さまざまな関係組織との連携・協力に努めていこう。あるいは人材育成にも力を入れていこうということで、ESDについても、この自然保護協議会の活動の中で取り上げて、阿部先生にご講演をいただいて勉強会をやったり、非常に興味を持って活動を続けているということでございます。

それから、次の損保ジャパンCSOラーニング制度のご紹介で、グレーのような表紙になりますけれども、これは私が今、専務理事をしております損保ジャパン環境財団が、2000年以来、14年間にわたって継続をしている、大学生、大学院生を対象としたインターンシップのプログラムでございます。開いていただくと、日本地図があつて、全国の各地域の環境NPO、NGOに学生を最長8カ月間、長期間にわたって派遣をして、インターンシップの経験を積んでもら

うと。NPOにとってみれば、人手不足の折、優秀な学生が来てくれるということで、企業とNPOがウィンウィンの関係を築きながら、協力して大学生の人材育成、体験をベースにした人材育成をしていこうと。こういう活動をしておりまして、14年間で累計700人以上の学生がこの制度を使って学んでおります。

それから、あと2枚あります。最初に青っぱいほうではなくて、オレンジ色っぱいほうのやつを見ていただきたいんですけども、1枚ものの市民のための環境公開講座、これは既に終わっておりますが、今年度の講座でございます。損保ジャパン環境財団は、環境分野の人材育成というのが一番メインの事業でございます、その一つの柱が先ほどのCS0ラーニング制度、もう一つの柱がこの環境公開講座で、こちらのほうが実は古くて、93年以来、20年間の歴史を持っている講座でございます。

それで、最後に、この紺色のチラシになるんですが、これは実は2月22日、これからのイベントでございます。先ほどのESDの学びあいフォーラムと日程がバッティングしてしまっており、これはしまったなと思っておるんですが、これは今申し上げた市民の環境公開講座の20周年を記念して、それから、環境財団の研究会で本を出版しますんで、その二つの記念を兼ねて、損保ジャパンのほうでこういったシンポジウムを行うことにしております。ぜひお越しただいただければということで、ご紹介させていただきました。

以上でございます。

○北川座長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、棚橋委員からお願いいたします。

○棚橋委員 全国小中学校環境教育研究会の会長を務めさせていただいております、棚橋と申します。よろしくをお願いいたします。

勤務は多摩市立多摩第一小学校になります。プロフィールにちょっと書きましたけども、もともとは中学校の理科の教員をしていて、管理職になって、小学校へ異動しました。小中9年間の教育を見ることがである、子どもの初等、中等教育の前半部分の学びというのを目の当たりにできて、大変よかったなというふうに思っているところですが。教員になって、すぐに環境教育に取り組んだきっかけは、私自身が小学校2年生のときに、北海道の知床の原生林の100平方メートル運動というのがあったんですね。無理やり親から小遣いを取り上げられて、土地を買わさせられて、多分今もどこかにあると思うんですけども、それがずっと心に残っていて、環境についての授業を理科の中でやっっていこうということを行いました。

環境教育からESDへということをお話ししたいと思うんですけども、環境の学習で、例えば

豊かな心を育むとか、それから、環境を大事にしようという、そこで止まって、果たしていいんだろうかというのがずっとあったんですね。ただ、なかなか忙しくて、次々にいろんなことを教えなきゃいけないという中では、なかなかその先へ進めない、そんな状況がありました。ESDが出てきて、いろいろな資質能力を高めよ、それが、結局、行く行くは問題を解決する力になるのだろうということで、今、私どもの研究会と、私の学校でもそうですけども、問題解決力を高めるということと、意欲を持たせようということを大きなテーマに研究活動を進めております。

ちょっとすみません、白黒の地味な資料で恐縮ですけども、あけていただいて、中にうちの学校の事例が載っておりますが、1、2年生が自然体験をしたり、3年生が地域を見て回ったり、4年生が多摩川でいろんな調査をしたり、5年生が田んぼをやって、その後、ほかの学校と交流をしたり、6年生もエネルギーを通していろんなことを学んだ後で、スウェーデンの学校と交流をしたりというようなことをしているんですが、かつての環境教育というものだけで言うならば、例えば4年生が河原のことを調べて、専門家の方に教えていただいたりして、大体おしまいと。多摩川をきれいにしようねというようなことで終わりですが、その後、テレビ会議システムを使って、多摩川の上流の青梅の学校と、それから大田区の学校の3校で交流をするということを行います。そういった交流教育とか、視聴覚教育とかということやら、それから、5年生のユネスコスクールの連絡網を使って、今、タイの学校と何とかコンタクトをとろうとしているんですけど、それは国際理解教育というふうに、環境教育が入り口でだんだん広がっていくという、そういう柔軟性があるというところが、ESDの素晴らしさです。非常に子どもたちがわくわくして取り組んでいけるという意味では、大変に楽しい時間が過ごせるんですが、これまた大変時間のかかることでして、全体の中でうまくコーディネートする必要があります。

もう時間が来たようですので、一つだけ、いろんなESDを見ていく中で、これは本当にESDなんだろうかと思うことがあります。ESDの意義がエデュケーションであるならば、ちゃんとしたどんな力がつくという目的が必要ですし、そこに至るプロセスもきちんと設計をしなければなりません。そこが今までの環境教育と大きな違い、体験とか心のさらに先にあるものというものをぜひつけていきたいなというふうに思っております。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、小川委員の代理の長手様のほうからご説明をお願いいたします。

○長手代理 本日は、事務局長の代理で出席させていただいております。NPO法人のこども環境活動支援協会の長手と申します。

お手元の新聞紙のリサイクルでできた封筒なんですけども、こちらのほうにたくさん資料が入ってございます。たくさんありますので、また後ほどゆっくりお目通しいただければと思います。

私の所属する団体は、市民・事業者・行政のパートナーシップでできている組織でございます。西宮市を実験都市として、2003年に全国で初めての環境と学習を組み合わせた環境学習都市宣言という都市理念に基づいて事業展開をさせていただいております。この都市宣言の中には、持続可能な社会に向けた取組の考え方が盛り込まれておりまして、当協会の代表理事が宣言文の素案を作成し、各種団体で構成する宣言策定委員会で協議を重ねてできました。

資料の中に、資料説明のペーパーが1枚、入っておりまして、資料の目録等ございます。資料20のパワーポイントのスライドで最初は説明させていただきます。持続可能な社会システムとして、制度設計についてご紹介させていただきます。

ESDを持続発展教育と言わせていただきますが、持続発展教育を進めるに当たって、まちづくり、教育理念、未来価値創造の三つの要素が大事だと考えております。まちづくりの方向性としましては、下のスライドのほうになります。私たちが展開するあらゆる事業は、市民・事業者・行政から成り立っております。そのことを意識しております。これらをもとに、各種事業につきましては俯瞰的に展開しております。それがA3のこちらのカラーコピーになります。

こちらの図の紹介をさせていただきたいと思います。こちらは持続可能な社会システムの構築に向けた取組ということで、真ん中には環境学習都市宣言の行動憲章をもとに整理させていただいております。教育理念の中にはESDの考え方を取り入れて、持続可能なまちづくりを進めております。この環境学習都市宣言の行動憲章にあります「学びあい」というのがあります。「学びあい」では、市民・事業者・行政が相互に学び合える関係性を位置づけておりまして、SR——あらゆる組織の社会的責任や、CSV——共通価値観の創造を意識して展開させていただいております。

特徴的な事業だけご紹介させていただきたいと思っております。システムづくりについて、ご説明させていただきます。私たちの西宮では、このA3の資料の右上を見ていただいたら、1、2、3とオレンジ色で番号がありますけれども、地球となかよしカードというものと、

2番目が小学生のエコカードというもの、3番目が市民活動カードというものになっておりまして、あらゆる世代に応じた環境活動が整備されております。とりわけ、小学校のエコカードシステムというのが特徴でございます、小学校の全児童（29000人）を対象としたエコカードシステムは、平成4年から続く西宮市の環境学習事業「地球ウォッチングクラブ(EWC)」の発展形として、平成10年に西宮市と共同開発したものです。いつでもどこでもだれでもできる活動として、学校・地域・お店という子どもにとって身近な生活領域におけるエコ活動をつなぎ、意識化してもらうためのカードです。

子どもが活動すると地域の大人からエコスタンプを押印してもらえ、そのすべての領域にスタンプがあり、且つ10個スタンプを集めるとアースレンジャーに認定されるというシステムです。この活動を基本にベースに各種事業を連携させ実施しています。

特に事業を実施するにあたり心がけている事は、事業を継続すること、各事業を同時並行で行いながら、有機的につなげるこれらによって各事業を体系化しシステムとして機能させることができると考えています。

また西宮では、ESDという言葉を使うのではなくて、結果的に、「振り返ればESD」ということを意識して、当初より活動させていただいております。

ありがとうございました。

○北川座長 ありがとうございました。

それでは、続きまして最後に、小澤委員からお預かりをいたしております資料につきまして、事務局から説明をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

○吉田室長 資料3(4)でございます。小澤委員の資料について、概要をご説明させていただきたいと思っております。

基本的ねらいということで書いていただいております。「環境」を通して学びや教育の質を高めて、持続可能な地域や社会をめざす。能力の育成に向けた学習、そして教育システムの再構築というのが、この「ESDの10年」後の環境教育の推進というのに必要じゃないかということ書かれております。

最初に、幼児期から高等教育までを視野に入れた持続的なEFSの展開の必要性と書いてありますが、EFSというのは「Education for Sustainability」ということで、ESDというのが、ユネスコ、国際的には使われていますが、オーストラリアとか、国によってはEFSという言い方をされているということでございます。

その1のところ、幼児期から高等教育までということですが、先生からのお話では、環境教育というのは横断的なものが多くて、例えば小学校の総合的な学習の時間とか、そういったものを活用していくというのが大切じゃないかというようなことをおっしゃっておられました。

また、ESDというのは、下のほうにあります、「problemを教えるのではなくて、issuesに対応する能力」ということで、問題を教えるということではなくて、争点とか課題と、そういったのに対応する能力というのを育てていくという教育なんだということをおっしゃっておりました。

2として、幼児期からの体験型環境学習ということですが、幼児期からのその体験ということが大変に重要だということでございます。例として、兵庫県の自然学校の取組などが出されておりますが、こういったものは全国にあってもいいんじゃないかというようなことをおっしゃっておりました。

次のページでございます。3として、20期日本学術会議提言「学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」ということで、これ、日本学術会議の提言ということで、小澤先生が小委員長を務められて、阿部委員もメンバーに加わっておられたということで、平成20年の8月に出されたものでございます。これが今後の我が国の環境教育に関するアクションプランとして、以下の七つの提言を行ったということでございますが、例えば教員の研修のあり方と、それから、日本の校内の研修といったもの、それから、大学についてですが、教養教育の充実といったものが書かれております。

続いて、4として、高等教育における環境教育の充実ということで、ただ今の学術会議の提言の中で、この大学教育に関して、①から③まででございます。大学の教養教育復活と環境教育科目履修の必修化、それから教員養成大学・学部での環境教育科目履修の必修化、それから教員の研修における環境教育科目履修の必修化といったようなもので、研修等の質の向上というものが必要だということで、次のページで、東海大学の事例ということで例示があります。東海大学の人間環境学科自然環境課程のカリキュラムでは、文理融合というのが一つのポイントとなっています。それから、「環境体験演習」というものがポイントだということで、先生からのお話では、ほかの大学、座学のみ大学でも、国立公園や各フィールドで自然体験活動を行っているところの協力を得て、体験学習を単位化するといったこともできるんじゃないかというようなお話がありました。

それから、5として、地域の多様性・独自性を尊重した環境教育ということでございます。

ここにつきましては、海外の取組の例も先生書いていらっしゃる、一つは、それぞれの取組ではありますけども、資金的な問題とか、そういったものも重要だというようなことを書かれております。

続いて、実は5が重なってしまっていて、ここは6になります。日本の環境思想と「科学知の統合」に基づき、総合科学体制で進める環境教育ということで、先生のお話では、日本のよさというのは、自然の条件を取り込んだ取組というのがこれまでずっと続いてきたということじゃないかということをおっしゃっています。そういった中で、日本人がこれまでに育んできた文化や思想といったようなものも踏まえながら、さらに研究をしていく。ひいては、環境教育の実践にとって、そういったことが不可欠じゃないかというようなことをおっしゃってしまっていて、それで、例えばということで例示をされております。梅原先生の序説と、それから、京都大学の「森里海連環学」教育ユニットというようなものを例示されています。

最後に、7となりますけども、多様な人材活用の促進ということでございます。ESDや、環境教育に、熱心に取り組んで個人というのが、なかなか就職とか、そういった場面で不利となることも多いんじゃないかということで、総合的な対策、適切な人材配置や外部組織との連携に関する新たな制度づくりが必要じゃないかというようなことをおっしゃっています。これらにつきましては、先ほどの提言の次の期、第21期の学術会議「高等教育における環境教育の充実に向けて」で、これも小澤先生が座長として取りまとめたものでございますが、これに詳しく書かれているということでございます。

最後のページに、環境省のやっております教員研修プログラムの案ということで、実は、先ほど私のほうから紹介させていただきましたけども、全国小中学校の先生等を対象に、関東、関西で1カ所ずつ計4カ所でやっておりますが、一日のみのカリキュラムになっているものですから、内容はなかなか濃く、文部科学省さんからの協力もいただいてやっているわけなんですけども、小澤委員からは、本当に一日でいいのかということを一言言っておいてくれというふうに言われております。

以上でございます。

○北川座長 ありがとうございます。

以上、各委員の皆様方からの取組、また、自己紹介も兼ねてのお話も賜りました。

今のご意見の中で、地域においての多くの取組もありましたし、これからの環境についての教育といたしますか、このESDの中で、子どもだけではなくて、川嶋先生のお話もありましたが、我々、よく小さいときに親の背中を見て育つというお話があったように、やっぱり子ど

もを変えるには親が変わらなきゃならないわけでありますので、大人のこの環境に対する意識の改革についても、このESDが有効に、今後、扱っていただければなという思いがありますので、そういう点も含めて、討議のほうに移らせていただきたいと思います。討議につきましては、ポイントに沿って意見交換をさせていただきます。

まず第1に、これまでの取組の評価でありまして、ESDのよさや意義、これまでの取組の問題点、課題、教材、研修、体制、財源等に、各委員の皆様方からご意見、今それぞれご発表いただきましたが、それについてのまたご意見もいただければと思いますので、よろしくお願いをいたします。

どうぞ、じゃあ阿部先生。

○阿部委員 このポイントについてお話をしたいんですが、先ほど私のお話が、紹介が途中だったものですから、これを見ていただきたいと思いますけども、まずESDのよさという話なんです。私、ESDは舞台装置という、装置としてのESDというのをあちこちで、今、この会議で言っておるんですが、つまり、そのつなぎ役ですね。持続可能性に関わるさまざまな主体、あるいは活動、行動、それをつなぐ役割がESDにあるよという、ですから、舞台装置という、その舞台はこの世界、それは地域でもいいし、地球全体でもいいわけですが、これは世界で、プレーヤーは市民であり、あるいはステークホルダーなわけですね。このプレーヤーをつなぐ舞台装置、それがESDのさまざまなものだ。つまり、環境はベースだと思いますが、環境であり、人権であり、いろいろなものをつなぐ、要するに個別の舞台道具、そして、それをつなぐのがESDなんだよという、そんなふうに捉えていただければいいんですけども、そういうような形を見たときに、日本の場合はかなりこれができつつあるという。

このESD、私も先ほど紹介したように、ずっと関わっておりまして、ですから、当初の時代からわかるんですが、このESDが日本に紹介されて、要するに、私ども、これを始めたときに、全国でこのESDを導入していこうということで、あちこちでESDの会合を開きまして、円卓会合ですね。これは環境省の支援で行ったんですが、そこで初めて、同じテーブルにさまざまな方がつくという、環境だけじゃない、福祉あるいは人権、平和とか、あるいは教師や役場の職員や、そういった人がつくという、これが初めて起きたんですよ。つまり、それは自分たちの地域をこれからどうやっていくんだろうかという、そういった舞台があって、その舞台として、装置としてESDが機能したということなんです。

なかなか、でも、これが長続きしなかったというのがあって、それは、やはりどういうイシューを、自分たちがどう解決していくのかという、そのプロセスといいますか、これは先

ほど川嶋さんがおっしゃったように、そういった問題をつないで、あるいは人をつないでや
っていくファシリテーターというものが、なかなかあちこちにいないという、そういった問
題があって、なかなかその一過性に終わってしまった場合もあるんですが、ただ、今は、全
国的にこういった場が必要だと。あるいはそういった場が出てきています。また、人も必要
だという、そういった形で、これは先ほど紹介したように、本当にいろんなところで、こう
いったいわゆるESDがつなぐ装置としての舞台というのが展開されてきている。これが非常に
いいことではないかと。

もう1点が、先ほどグローバルな話がありましたが、ローカルとグローバルというですね。
日本の場合は、このローカルにいろいろ進んでいる。例えば、それは地域づくりとしてのES
D、あるいは学校でのESD、ただ、グローバルとどうつないでいくかというのは、学校の場合
はユネスコスクールですから、世界とのつながりはある。これは非常にいいことなんですね。
ですから、地域においてもつないでいく。グローバルイシューの問題と地域のコミュニティ
のイシューの問題、ローカルイシューの問題をどうつないでいくか。そのときに、日本の場
合、例えば高齢化、これは非常にいいことなんですね。長生きできるようになったとかはで
すね。ただし、それに伴う問題がいっぱいあるわけですよ。そういった例えば高齢化の問題
あるいは過疎化の問題、そういった問題に関しては、日本が比較優位性がある。つまり、い
ろいろな経験を積んでいるわけです。ですから、そういったいろいろな経験を積んだ日本のエ
キスパート、そのESDのエキスパートというのは、まさに世界で活躍できるという。

今、政府は、グローバル人材育成というふうに言っておりますが、グローバル人材ですね。
つまり、日本のローカルに精通した人は世界で活躍できる場はあるんだよという、グローバ
ル人材の育成の場としてESDを使っていくという、これも先ほども大学の話もありましたけど
も、非常にこれが有効なんじゃないかと。そういったことを考えていくと、まさにMDGs後のS
DGs、こういった場で日本が、ローカルなSDを大事に、大切にしつつも、世界で活躍できる人
材を出していけるという、そういった意味で、日本のプレゼンスができるんじゃないかと、
そんなふうに思っております。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

今、阿部先生のほうから、ESDが舞台装置であり、我々、人間といいますか、市民や国民が
生きていく上において、地域で活動する部分において、このESDを使ってネットワークをつく
っていくというお話であったと思いますし、人材の育成というお話がありましたが、このES

Dというものについての意義、評価の中でどこにあるのかなというところも、ぜひ委員の皆さん方の意見を聞きたいなと思っているんですが、座長の私あまりしゃべったらいけませんので、この辺の意義についても、最終的にESDの意義というのどこにあるのかなということ、きちっと定義づけるといったらちょっと語弊がありますが、方向性が見つけられればなという思いもありますので、その点についてのまた意見があればと思います。

どうぞ、関委員のほうから。

○関委員 ESDの意義あるいはよさということですが、やはり一つは、横串を刺すというところではないかと思うんですね。世の中にいろんな問題があって、それぞれ、解決がなかなか難しい。環境の問題であったり、貧困の問題であったり、格差の問題であったりするんですけども、やっぱりそういったものを一つ一つ別の問題としてではなく、全体として、あるいは相互関係を考えながら解決策を考えていこう、横串を通して問題を捉えるという、そこが、そういう考え方ができるというのが、ESDの一つのメリットではないかなというふうに思うんですね。

それともう一つは、長期的な視点ですよ。とりあえず今日、明日、どうしようというのではなくて、10年先あるいは20年先、もっと50年、100年先のことまで考えた上で、最適の解を見つけていこうと。これはESDの大きな特徴だと思いますし、ある意味で、現代社会に非常に欠けがちなところだと思うので、これを強く主張していく必要があると思うんですね。

そういうふうに考えていくと、やはり一つのキーワードは、いろいろなステークホルダーが解決に参加をしていくこと。課題もからみあって非常に複雑ですし、やらなきゃいけないことがたくさんある。誰かだけではできない。政府だけでもできない。もちろん企業だけでもできない。そういう中で、いかにいろんなステークホルダーを巻き込んでいくのかということが重要であると思います。今後は、今までESDの中でどうしても参加が少なかったセクター——これはちょっと課題のほうの話になってしまうのかもしれませんが——例えば企業というのは、あまりESDが関わり方が薄かったんだと思うんですね。そういったところを、今後、改めていかなきゃいけないなと思います。

○北川座長 ありがとうございます。

じゃあ、よろしいですか、先にどうぞ。

○長手代理 ESDのよさ、意義のところなんですけれども、実際に地域でこれまでもESDを意識した活動をさせていただいています。少子化、グローバル化などが進む中で、私たちは「つながり」をどのように構築していくのか考えてきました。総合的な学習の時間が少し軽視さ

れがちな状況の中で、ESDが総合的な学習の時間の考え方と近しい教育的な視点を提案したこと
の意義は大きいのではないかと考えています。

○北川座長 ありがとうございます。

じゃあ、棚橋委員。

○棚橋委員 小中学校の現場からの話は私だけということなので、学校の話をしたと思う
んですけども、先ほど関委員さんのほうから、システム思考力とか、全体を俯瞰するよう
な力というお話が最初にあったと思うんですけども、要するに、それは能力なわけです
よね。ですから、人材育成という意味では、未来につながっていくような能力育成とい
うところが、ESDのところでは重要だなというふうに思っているんですね。じゃあ、ど
ういう力なんだという、そういう私どもはよく研究会で話をするのは、真の学力って
何なんだい、将来使える力って何なんだいという、そういう議論をよくするん
ですけども、そういったものがあってこそ、自己実現ができる。

私は、中学校の教員でしたから、進路指導をしていました。高校や仕事についたり
いろいろですが、自己実現を図る、図れるためには、力がなければ何とも打
開ができない。それは、そういう力の中には、当然持続可能な社会をつ
くっていくような力もあるわけですね。問題を解決する力を捉えて指
導していく必要があると思うんですね。そうすると、何が本当の真
の学力なのかという議論が必要ですし、じゃあ、それを高めていくた
めには、教員はどういう指導が必要なのかということになってくるわけ
ですね。ですから、教育そのものを大きく転換する力がESDにはあ
ると思っています。

○北川座長 ありがとうございます。

実平委員。

○実平委員 15年ぐらい前にLEADという組織に参加していました。これはLeadership for E
nvironment and Developmentを略した世界的な組織でありまして、環境省の方も何
人か参加されていますけども、基本的にはESDと同じようなことを目指しているとい
うことだと思えます。つまりSustainabilityの追求ということなので、これは当然各
階層で必要ですし、生涯にわたって重要なことだろうなと思っています。これま
での取組についての質問になるかもしれませんが、実行計画があって、それが工
程表に落とし込めていて、さらに誰が責任を負って、何をやるの、そのとき
の成果は何なのという辺りが、どこかで出ているのか出ていないのかとい
った点が気になります。その辺がもしなかったら、少し強調されてやるの
がいいのかなというように考えます。少し的外れかもしれませんが。

○北川座長 ありがとうございます。

まさしく、今、実平委員のおっしゃられたように、成果といいますか、そちらの部分において、これまでのESDを初め、この環境教育、環境問題について、最初に川嶋委員のほうからお話がありましたように、もう脅し文句といいますか、大変だ、大変だというばかりじゃなしに、何かやっぱり結果において成果が見えるとか、これに取り組むと我々は浮き浮きしてくる、楽しんだというようなところが、このESDの中で、子どもや大人の我々も認識をしていければ、一つの方向性かなという感じを、最初、川嶋委員のほうから、これまでの環境というのは、地球温暖化、もう大変だ、大変だ。やれ我慢しろというような話がありながらもちょっと多かったものですから、今、安倍内閣で、よく外交においても積極性とかいろんな話が出るんですが、経済の——今日は経済界からも来ていただいておりまして、やっぱり今まで、環境というと、どうしても自然環境とか、それを守る話が強かったんですが、私、阿部先生が最初にお話しされたように、ESDというのは、やっぱり人権もあり、社会全体が含んでいる、もう多くの課題が全てここに含まれているというのもありまして、人間というのは一人でも生きられませんし、自然の中だけではなく、やっぱり社会活動もしていかなきゃなりませんし、そういう中の経済もありますし、そういう全てのものが共生をしていく基本になるのはこのESDだという思いをしているものですから、今日、先生方、いろんな意見をいただいておりますが、やっぱり究極の中で、一人ひとりがその目標に向かって、必ず成果が出てくる。その成果を出すためには、自らも楽しめるというか、浮き浮きしてくるもの、そういうところにあると思うわけでありまして、そういう点において、さかなクンなんかは、もう魚だけと言ったらおかしいですが、魚を捉える中で、子どもたちに対して非常に浮き浮きさせてくれる部分もありますし、回遊魚——我々、政治家というのは、カツオや回遊魚みたいに止まってしまったら終わりの部分があるんですが、魚の部分で、前へ向いてどんどん進んでいかれる、そのモチベーションとか、その辺のところについて、ちょっと参考になるようなご自身の意見も言っていただければありがたいと思うんですが、こっちから振り向けて申し訳ないですが。

○さかなクン委員 副大臣様、ありがとうございます。

私は、小さいときからお魚が大好きでして、また、絵を描くことが本当に大好きで、父祖や母は、もうハイハイしているぐらいのときから絵を描いて、何か見て夢中になっては絵を描いていたということをよく話していました。

今、魚が好きになって、先生方からたくさん学ばせていただいて、そして、講演会とかイ

ベントなどで、魚の楽しさ、おもしろさ、そして魅力、そしてお魚を通して、自然界の今抱えている問題などもお話をさせていただきます。そうしますと、大抵講演会、私がお話しさせていただくときというのは、すごく小さなお子様が聞きに来てくださるので、小さなお子様向けにお話をしようとは思いますが、やはり来てくださる方が小さいですので、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、すごく幅広いご家族で聞きに来てくださることが多いです。そうすると、おばあちゃんも来てくださっている、おじいちゃん、メモをとってくださっている、これがまたうれしいですね。ですので、何というか、この「持続可能な開発のための教育」というのは、川嶋先生がおっしゃいましたように、子どもたちだけではなく、まさに大人も子どもも、もうみんなで学んでいくということが大事なんじゃないかなと、ここ最近、すごく思います。

あともう一つは、去年、初めてアフリカに連れて行っていただきました。これはJICAの皆様が取り組んでいらっしゃる「なんとかしなきゃ！プロジェクト」の一環として、アフリカのセネガルに連れて行っていただきました。アフリカのセネガルの人々は、主に水産業を生業として暮らしていらっしゃいます。ところが、魚、魚介類をたくさんとり過ぎてしまって、非常に資源量が減少してしまったそうです。そこで、日本の水産のプロフェッショナルの先生方が、日本の魚のとり方、あとはカキの養殖の方法、垂下式養殖ですね。カキの養殖方法、あとはタコを持続的にとるためには、タコつぼを海にたくさん沈めて、それはタコをとるためではなく、タコが卵を産んで、お母さんダコが赤ちゃんをふ化するまで、タコつぼの中で守るんですね。そのためにアフリカのセネガルの人々にタコつぼをつくるというのを指導されて、そして、そのタコつぼもセネガルの土でつくって、そのタコつぼを沈めると、地元の土でつくったものですので、1年ぐらいうると壊れてしまうらしいです。ところが、自然の土でつくっていますので、そのまま海の環境の一部となるということで、そういう活動をされて、実際にタコが、お母さんダコが本当に中へ入って、卵を産んで守っているのかというのを、ちゃんと水中カメラで守っている光景も撮っていらっしゃって、それも見せていただいて、タコのお母さんが卵を守っているというのを、地元のセネガルの漁師さんたちもすごく目を丸くしてご覧になって、私も一緒に見せていただいて、これは本当にすばらしい活動だなと。しかも、日本が四方を海に囲まれて培ってきたその水産の技術を海外にも教えて、それを海外の人々もカキを育てる喜び、タコがタコつぼの中で卵を産んで、そして、また増えてくるという、その喜びを知っていらっしゃる。そして、日本の方々がセネガルに魚市場をつくられて、その大きな魚市場で働かれている方々の生き生きとした表情を見

て、すごくうれしく思いまして、ちょっとインタビューもさせていただいたところ、僕たちは、私たちは、もう本当に日本に感謝して、日本の人々、大好きということをおっしゃっていました。やはり何というか、つながるといことがすごくうれしいなとともに、もう世代を超えて、みんなで続けていきたいという気持ちにさせていただけるということができれば、どんどん続いていけるのかなと思います。

○北川座長 ありがとうございます。

こちらから話を振って、申し訳なかったんですが、体験に基づいてのお話でありまして、さかなクン委員の資料にも水の循環というのがあるんですが、世の中というのは、全てこういう循環というか、関連をしていっているというところにあると思いますし、先ほど長手さんから、西宮での取組のお話、たくさんの資料があったものですから、これを見るだけで、西宮市、熱心に取り組んでいただいているなということもわかりますし、ああいうカードをこしらえて、子どもたちというのは、はんこを押して、昔の僕らはラジオ体操のはんこじゃないんですけど、参加をすればはんこを押していただいて、全部埋まると何か達成感があるわけですね。そういう中で、これに取り組んで、一つの称号を与えられるとか、そういうことをやっぱり子どもたちに意識をしていってもらいたいというのは、非常に有効な手だてかなという感じもしますので、そういう点も含めて、もう各委員のお話を聞いておきますと、次のこれまでの取組の評価から、今後の方向性とか、さっきもちょっとお話をさせていただきましたが、そちらのほうにお話を進めていければなと思っていて、今年の11月の世界会議の機会を活用して、認知度の向上も含め、何をすべきかという点、また、最初に申し上げましたが、世界会議以降もESDを継続していくために何をすべき、そして、我々、行政、国、自治体に期待をすることといたしますか、国や行政はこれをやらなきゃならないというようなことがありましたら、各委員のご意見をいただければと思いますので、よろしく願いをいたします。

阿部先生、何かございますか。

○阿部委員 今後の方向性ですが、②の世界会議以降の継続のお話、これは先ほど、冒頭に私が申した、今のままではもう失速しかねないと。なので、何とか来年以降、継続する仕組みをつくっていただきたいということですね。これは環境省だけでは多分だめだろうと。ですから、文科省を含めた、つまり、内閣官房に連絡会議の事務局がありますが、そこがやはり音頭を取っていただいて、オールジャパンといいますか、そういったところが関わる仕組みを何とかつくっていただきたいと。この中身的な案は、私ども、いろいろなアイデアを

持っております。

それと、この11月の世界会議の機会を活用して、認知度の向上を含めて何をすべきかということなんですが、まず、先ほど実平委員がおっしゃったように、ESDがまだまだ知られていないという、ですから、これはメディアをまず最初にやはり活用すべきだろうと。これは私どもが行っている世界の祭典は、今回、載録した朝日新聞のページを持ってきていますが、やはりこれは新聞だけではなくて、ラジオ等含めたあらゆるメディア界に協力いただいて、いろいろなところでこのESDというのを知らせていくと。本来はこういうのを出すときには、何らかのスポンサーというのが必要なんです、そこはもういいと、何とかしろという、そこも含めて、これをどうやるかというのはありますけども、とにかくそのメディアを通じて、ESDがあるんだよということをやったりこれは知らさなきゃいけないと。まだまだこれ知らない方が多いですね。広まってきたとはいえ、多い。ですから、それは非常に大きいだろうと。

さらに、さかなクンさんを含めて、今キャンペーンのために全国へ行ったださっているんですが、そういった方々を、まだまだ数が少ない。今は文科省さんが数人頼んでくださっておりますが、これをもっと広げて、いろんな方々がESD大使、どんな名前でも結構です。今度、環境省さん、子ども大使も今度の2月の会合の後、決めるとおっしゃっていますが、とにかくいろんな方々が、ESDという看板を、あるいはバッジを持って駆けずり回ってもらおうという、とにかくそういうことを人海戦術から攻めていこうと。メディアと人海戦術と、それが必要じゃないかと。同時に世界会議においては、やはりこれは、まさに日本のESDは、私、あちこち、海外も見えておりますが、かなりこれはすぐれたESDの実践なんです。なかなか、ところが、これが世界に発信されていないんですね。私も発信、なかなかできていないという。それで、今年辺り、いろんな言い分が出そうということで、海外の出版社から来ているんですが、ですから、これもとにかく世界から来た方々に見ていただくことが大事だろうと。なおかつ、国内でESDに取り組んでいる方々が、やはり今まで、本当にすぐれたことをやっていたらっしゃる。それがなかなか共有できていないという、共有の場をつくっていただきたい。ですから、これ、最大イベントとして、日本の国内のESDの関係者が集う場、関係者だけではなくて、この際、ESDに関心を持ったよという方を含めて、そういった方が集える場をぜひ設けていただきたい。同時に、日本の成果を海外に発信する、まさにフェースツーフェースで発信すると同時に、何らかの加工をして世界に発信できるような、そういったWeb等を含めて、そういったことも考えて、ぜひいただきたいというふうに思っております。これ、フォロー

アップ会合もある予定なんですけど、フォローアップの前に、やはりこういったことをぜひ行ってはどうかと。

8月に国連大学で、環境省、それから文科省を含めて、そういったところと私も共催する場では、そういった場、あそこ、国連大学の場ではつくりませんが、それには非常に足りないですよ。ですから、愛知・名古屋、それから岡山を含めて、これは全国の例えばRCEのある場所とか、それから、環境省であれば、その環境省の事務所がある場所、いろいろありますよね。そういった場を使って、この前、愛知ではESDイヤーというのが始まりました。でも、ESDイヤー、愛知だけではやはりもったいないですよ。これは全国でやっぱり展開しなきゃならない。ですから、このESDイヤーにみんな合流していくとか、そういった中でも、これはまだ遅くないので、ぜひつくっていただきたい。そういった中で、全国で展開していくという場をぜひつくっていきたいと思っております。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

川嶋委員、何かご提案があれば。

○川嶋委員 悩んじゃって、何を話そうかなと思って。ちょっと前に少し戻るんですけど、取組の問題点、ちょっと今日、環境省の方やいらっしゃるところで、言いにくいというか、言っちゃうんですけども、僕、やっぱり環境省の研修所とか、それから林野庁の研修所とか、呼ばれて行くことはあるんですけど、あそこには研修の専門家はいないんですね。行政の専門家はいるんだけど、だから、結局、何とか先生、何とか先生と呼んできて、適当に時間の箱に入れて、どうぞ話してください。4泊5日、月～金の研修で、僕は水曜日ぐらいに行くと、月、火、どんな流れで、どんなことで、僕に何を期待しているのかということも聞いても、そのことをなかなか答えられなくて、いや、いいです、思い切ってしゃべってくださいと。いや、そんなことを聞いていないと。だって、研修というのは一つの流れがあってできるはずだから、誰が全体のコーディネーターなんですかとすると、いないんですね。だから、もう実にもったいないことをずっとまだやっているんですね。僕、文科省の研修センターはあまり行ったことないので、わかりませんが、ただ、国立の青少年教育施設なんかは関わっているんで、一体幾らかけているんだろうなというふうに僕は思いますね。もちろんそれが全く無意味だというつもりはありません。でも、どうして、せっかくこれだけの人がこれだけの時間、ここに集まっているなら、もっと有意義な、有効な、有機的な使い方ができるはずだと。

先ほどから、再々、いわゆる話題に出ている協働・連携、つまり、つなぐということですね。だから、つなぐ専門家というのが、たまたま一つの行政があれば、あいつはうまいよなとか、もちろん政治家の中でも、あの人は話をまとめるのが上手だよなとか、それぞれいらっしやると思うんですけど、何か、たまたま生まれてきて、能力にただ頼っているだけで、ところが、僕は、つなぐ能力とか、そういう専門性というのは育てられるものだと思っています。一つの技術、この会議をどう進めていくかというのも一つの技術ですよ。だから、そういうことをもっともっと徹底的にやるべきだと。僕は、本当は学校教育の中からも、そういう時間をちゃんとつくって、一つの問題が生まれたときには、さまざまな関係する人がいて、その人たちをどうみんなの意見を聞きながら、どういう解が、答えが考えられるんだろう、みんなで考えてみようと。もうとにかくやってみようと、描いてみようと。この、何か僕は、教育、根本的にそこら辺から変えられるはずなのという思いが、実に残念だなと。ただ、やっているところは既にあるんですね。幾つかの国の研修も、今、変わりつつありますし、だから、僕はできないとは絶対に思わない。

それから、先ほど描くという話をしましたが、さかなクンのやっぱりこういう絵を見れば、何かやっぱりこういうところに、みんな、こんなふうに住らしたいよなというふうに思うじゃないですか。僕は昭和28年生まれですけども、僕の小さいころの未来の絵というのは、鉄腕アトムが飛んでいて、何かこんな高速道路みたいなのがあって、あれがみんなの描く未来の絵だったんです。じゃあ、今、未来の絵というのは誰が描いていますか。ないですよ。だから、まずやっぱり未来の絵を描く。何を食べ、どこに住らし、どんな仕事をしていて、どんなふうにながつながっていくのかという絵をやっぱり描く作業をみんなですないと、ただただもう、繰り返しになっちゃうけど、脅しの環境教育ではやっぱりだめだというふうに思うわけです。

先ほど、ちょっと言ったその研修所の問題は、あれは集合研修という場面の話で、もちろんOJTの研修もあれば、それから、先ほどちょっと言ったオンラインの研修もあるわけですね。ですから、こういうものを上手に組み合わせて、ただただ集合研修だけよくするということがじゃなくて、そこで学んだことをOJTでちゃんと生かしながら、もう一回戻ってきて、集合研修で確かめる。あるいは優秀な講義なんかをオンラインでどんどん受けていけばいいと。みんなで集まったときには、そこでの疑問を出し合うとか、つまり、教育の組み立て方のプロにやっぱりみんながなっていかなきゃ——みんなじゃないな、みんながならなくてもいいや——それはやっぱりすべき人がいるはずなんです。国の研修所にそのプロがいないとい

うのが実に残念ですよね。何か話すのに熱くなっちゃって、すみませんね。

○北川座長 ありがとうございます。

確かに、研修とかいろんな運営の中で、どうしても行政がやると画一的なものになっているものですから、せっかくの費用と時間を使いながら、もったいないなというのは、もう先生のおっしゃるとおりだと思いますし、年代が多分一緒なので、僕なんかも、小さいときに未来なんかは、アニメとかを見ていると、宇宙家族なんかでしたよ。乗用車が空を飛んで、家の前でぱっと止まっておりるとか、そういうのがありましたので、そういうことを考えると、これからの将来の姿というか、描けるような方向性がこの中でも出てくればなと思いますので、ぜひ本当にこれから貴重な意見をいただければと。

今日は最初の会議でありますので、そういう中での意見ということで、関委員のほうからお願いします。

○関委員 ESDを広めるためにどうしたらいいかということで、ちょっと乱暴な言い方になっちゃうかもしれないですけども、どうしてもESDって、一般的な認識というか、受け止め方として、要するに学校教育における環境教育の話なんだろうと。割とそういう考え方が、企業人なんかは特に多いと思うんですね。要するに、我々はあまり関係ない話だなというふうに思ってしまったところがあって、せいぜい小学校への出前授業で企業人が行くとか、その手の話で止まっちゃっているというふうに思うんですね。ただ、本来は、まさに何度も出てきているように、持続可能な社会に向けて、変革のリーダーシップをとれる人材をいかに育てるか。これはもう企業人にとって非常に大きな、かつ重要な話なので、そういう意味で、やっぱりここは、例えば経団連ですね。ちょうど名古屋の生物多様性のCOP10のときに、経団連が生物多様性宣言というのを出したんですね。これはちょうど今、クロスリンクの資料の一番裏にあるのがそれなんですけど、これはそのCOP10を期して、企業と生物多様性は、今まであまり関連がないと思われていたけども、そうじゃないというのを経団連自らが宣言しようというようなことをやったんですけど、これにヒントを得て言えば、ESDにおいても、経団連のESD宣言みたいなものを出して、企業が改めて認識する、あるいは企業がもっともっとそこに参加するきっかけを、形としてつくっていくというのも、一つの方法ではないかなというふうに思いました。

○北川座長 ありがとうございます。

実平委員。

○実平委員 今まで「見える化」から「つながる化」ぐらいが見えてきたということだと思

うんですが、やっぱり今後は、「できる化」というんですか、あるいは「成果を出す化」というところのステージだなというふうに感じています。

それで、やっぱり重要なのは実践かなというふうに思っています、先ほど岡山で何かが開催されるというお話を聞きました。実は、私、今、東京でサラリーマンをやっていますけども、実家が岡山でありまして、結構岡山県の北のほうの田舎でありまして、父親が倒れたものですから、里地里山があって、放っておけば耕作放棄地というところでもありますけども、5年ぐらい前から、時々帰って、といっても、東京からの往復なので、年に5~6回ぐらいですけども、帰ると、耕作放棄地を里山の保全といったら格好いいんですけど、とにかく草刈りを力いっぱいやって、それで、樹木とかいろんなものを植える。特に果樹を中心にした植樹を5年間やっています、これまでに253本、年間50本ぐらいの平均で植えています。

ただ、獣害というんですか、シカとかイノシシで結構やられて、つらい目に遭うんですが、それでもめげずにいろんな防御をしながらやっている。これ、結構ある意味では、普段と違う仕事なわけなものですから、楽しいんですね。充実があって、汗を流すということもあるし、それから、食物等々が育つということはとても楽しい。春になると芽が出て、次に花が咲いて、実をつけると。とても楽しい。うちでは、大体お父さんの言うことをほとんど聞いてもらっていないし、会社でもいろいろと言うんだけど、聞いたふりをするというのが多い。でも、植物はやっぱり本当に正直で、枯れたりすると、ああ、僕の手入れが悪かったんだと、世話が悪かったんだとということを考える。

何が言いたいかというと、こういったフィールドが結構田舎にはあるんですよね。耕作放棄地が全国的に多いのは過疎化をしているので、若い人がいないということが原因です。このフィールドを環境教育、ESDのようなものと結びつけるような政策というのはあるんじゃないかなというふうに思っています。

例えば、言葉は悪いんですけども、環境とか農業の徴兵制というんですか、どのステージがいいのかわかりませんが、どこかのステージで、1年間、ちょっとこの耕作放棄地を好きにやってみろというふうなことが制度化できないか。会社でも、官公庁でもそうだと思いますが、心の病気を抱いていらっしゃる方が、そういうところへ行き活動することで生き返るんですね。我々も、そういう意味では、工場等々でそういう空間をつくっています。メダカを育てるだとか、ホトケドジョウを育てるだとか、植物を観賞するとか。やっぱりすごく和むんですね。その和みと、実際の需要というか、もう困っているところを助けるというのを含めて、省庁横断の大きな政策って、僕はあり得るのかなと思っています。ちょっと話が

ずれていたかもしれませんが、検討をいただければというふうに思っています。

○北川座長 ありがとうございます。

じゃあ、棚橋委員。

○棚橋委員 ESDはつながりということを重視するんですけども、ぜひ、教育のほうから申し上げれば、環境省と文科省のつながりをもっと太くしていただけるとありがたいなと思います。特に、今日、文科省からオブザーバーがいらっしゃっていますけども、ESDが国連で決議されたときに、ユネスコを受けなさいという話になって、ユネスコスクールになった関係で、どうしても国際統括官のところへという話になるんですけども、でも、都道府県の教育委員会は初等中等教育局を見えています。ですから、初中局が動いてくださると、ぱっと動くと思います

教員の研修とかいうのは、ボトムアップで教員が必要だと思って研修する方法と同時に、教育委員会からやりなさいという研修なりアクションはあるわけで、そういうものもぜひ使えたら、大きく学校現場は変わっていくというふうに思います。

○北川座長 ありがとうございます。

まさしく、この「ESDの10年」というのが、ヨハネスブルグの後、中央省庁の取組をずっと見ていますと、私は議員になったのが2003年ですので、このESDと大体歴史が一緒なんですけども、阿部先生もよくご承知のように、円卓会議を立ち上げるまでにおいても、文部科学省、今日来られていますけども、なかなか熱心に取り組んでいただけなかった部分もあるのも確かです、その中で連携というのが希薄かなというところもありましたが、しかし、これ、今年の秋に大会があるということで、やっとなんかおかしんですが、文部科学省も本腰を入れ始めておりますので、これを機に、横の連絡というか、つながりもしっかり結んで、ぜひ成功裏につなげていきたいと思っておりますし、それまでの発信の中で、昨年、我々、自民党の部会でも、岡山の議員団からいろんな意見があって、やっぱりもっと地元で発信をしたいんだけど、何をしたいのかわからないというような話があって、阿部先生、前、岡山のビルの前で、ESDという字をビルの照明で表していただいているような例はあるんですが、岡山の人でさえ、あれは何やというようなところもあるようでして、これから、ぜひこういう会議を、懇談会をこしらえて、ここからESDの発信を秋に向けてより強くして、そして、日本のみならず、世界の人たちにもこのESDというのを広めていきたい。

ESDというのは何だというのは、もう先ほど来から委員の先生方もおっしゃっておられるように、まだまだ理解をされていないところがいっぱいあると思うんですね。このESDの意義と

いうところもあると思いますし、私、究極の目的というか、地球、人類も含め、究極の目的は、やっぱり一人ひとりの人たちが争わずに、世界のこの平和というか、人類が共存共栄して、地球という生命体が寿命を全うするというのが、人類の究極の目的だと思うんですね。ESDというのは、やっぱりそういうところにもつながる部分があるんじゃないかなと思うんですね。幅広い、人権から、男女の問題や人類の問題、文化、歴史、全てが含まれているところだと思いますので、このESDを広めることによって、それから、子どもたちの教育の中で、先ほど来から出ていますけども、一人ひとりの子どもが自分勝手に考えない。我々、大人もそうです。いろんな人たちがいて、多様性があると。多様性を理解して、自らも多様性を持っている人材を育成をしていくことによって、世界の人々の歴史や立場も理解をできて、共生していく、共存できるという、そういうところにやっぱり向かっていけるんじゃないかなという思いをしていますので、ESDというのは、これからの地球というか、人類の将来を見据える上において、一つのキーポイントになるんじゃないかなということで、秋に向けても、こういう懇談会をまず立ち上げさせていただきましたので、そういう意識を共有しながら、これからも進めていきたいと思っております。

時間のほうが、あと10分弱あるものですから、まだまだ意見が、文部科学省のほうから、申し訳ありません。どうぞ言っていただければと思います。

○文部科学省 文部科学省の国際統括官付の榎井と申します。

もうお時間もあまりないということですので、簡潔に申し上げたいと思いますけれども、先ほど初中局をもう少し巻き込むというお話がございました。これまでのご意見の中で、どうしてもこれまではESDイコール学校での環境教育という狭い捉えられ方をしていたというお話がございました。もう一つ、狭い捉えられ方という点では、ESDが全く知られていないときに、どうやって押し進めていくかということを考えたときに、ユネスコスクールを中心に進めていきましょうという施策を、これまで、文科省としてはやってきたんですけれども、それが、ユネスコスクールの数はかなり増えてきましたので、一定の効果は上げているんですが、逆に、そのESDというのは、ユネスコスクールだけがやればいいんだという誤解を与えてしまったところもございます。そこは日本ユネスコ国内委員会の議論の中でも、ユネスコスクールというのはあくまでも拠点であり、その拠点を中心に、それぞれの地域の企業ですとか、NGOですとか、それからユネスコスクール以外の学校、社会教育施設、いろんなESDの関係者がありますけれども、ユネスコスクールを拠点として、そういう方々も皆さん巻き込んでいった形で、地域一体として、ESDというのを推進していくことが必要なんじゃない

かということで議論が進んでおります。

それで、コーディネートをするに当たって、ユネスコスクールの学校の先生方が、それを全部アレンジするのは厳しいので、それをコーディネートする人の人件費を一部補助する形で、地域における連携というのを推進していく事業というのを来年度から開始する予定にしております。そういう議論の中で、初中局とも話はしております、やはりESDの意義の中で、つながりというお話が先ほどから繰り返し出ておりますけれども、学校現場において言いますと、例えば総合的な学習の時間の意義とか、その教科間のつながりというのを再認識していく上でも、非常にESDというのは意義があるんだということを学校の先生方からも伺っておりますので、そういう話も初中局とも少しずつではありますけれども、話しております。

それから、環境省さんとの連携という意味では、担当レベルでは、もう本当に週何回となく、室長と企画官レベルではお話をさせていただいておりますので、今後も、またさらに世界会議に向けて、協力を深めていければというふうに考えております。

○北川座長 ありがとうございます。

文部科学省からもきちとしたご意見も出てきまして、我々、それぞれがやっているんじゃないしに、連携をもってやっていきますので、その点も、また委員の皆さんにもご理解いただいて、ご協力をお願いをしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

何か、じゃあ、阿部先生。

○阿部委員 先ほど認知度の向上の点で、ちょっと1点、言い忘れたんですが、なるべく早い時期に、いわゆるESDに関心のある方はもちろんなんですが、ESDのことをこれから説明するとしても、いわゆる著名人とか、あらゆる分野といいますか、どんな方でも結構なんですが、そういった著名人の方々に、専門家も含めて、ESD賛同アピールみたいなものをしていただいて、これを公表するとか、これなどはそうお金がかからなくてもできるんじゃないかというふうに思いますので、とにかくそういった機会を使って、いろんな方々に、10年目なんですけども、まずESDをこの機に広めていくんだと。今年、広めなかったら、もう来年以降はないよということなので、とにかくいろんな場面を使って広げていきたいというふうに思いますので、ぜひ、環境省さん、省庁の中におかれて、このアピール、これは民間も当然やりますので、一緒にそういうアピールの場をぜひつくっていただきたいと。これは、だから、今回、発表するのが6月とすれば、それぐらいに合わせて発表できる場があるといいのではないかなと思っております。

また、もう一つ、行政への期待なんですけど、国のイニシアチブは当然なんですけども、自

治体のイニシアチブ、非常に大事です。昨年のこのESD地球市民会議、これは手元の新聞記事を見ていただければいいんですが、そこで、自治体のイニシアチブという、そこはローカルイニシアチブ、それをテーマとして今年もやるんですが、ですから、本当に私は少し地域再生に行っておるんですが、ESDが非常に格好のテーマになっています。そして、Iターンで若者が入って、ESDをやって地域再生をしていこうという、これが全国で生まれていますので、やはり自治体のイニシアチブは非常に大事ですので、この点を、これも今後、次回の論点にしていいただければと思っております。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

ほかに委員の皆さん、今日のご意見というか、特にございませんか。

時間のほうが、大体定刻が来ましたので、各委員の皆様には、大変お忙しい中、貴重な時間を賜りまして、ありがとうございます。また、ご意見のほうも、それぞれの立場の中での話もいただきました。

今後、この会を何度か開かせていただきまして、先ほど、阿部委員のほうからありましたが、賛同者を募る話もありますが、各界の方々から意見を賜る機会もあればと思いますし、そういう場を通じて、より充実した意見の中でまとめができていければと思いますので、今後の日程等については、事務局のほうからご報告をさせていただきます。

○吉田室長 本日は、熱心にご議論いただきまして、ありがとうございます。

今日いただきましたご意見等を取りまとめまして、整理をいたしまして、第2回の懇談会の議論につなげたいと思っております。また、実平委員からも、実行計画の落とし込みといったような話もありましたが、関係省庁連絡会議等の動きもございますので、そういった動きも含めて、改めてご説明をしたいなというふうに思っております。

それでは、資料5でございます。今後のスケジュール(案)をご覧いただきたいと思うんですが、既に委員の皆様には、日程の調整のご連絡をさせていただいているところでございますが、第2回を2月の下旬～3月の中旬に開催をしたいと考えております。先ほど申しましたとおり、今日の議論を踏まえてということでございますが、さらに必要があれば、関係者からのヒアリングというのも行いたいと。第3回を4月中・下旬に行いまして、そこでは、ヒアリングも可能性があればということでございます。あと個別の議論ということと、その段階で報告書の骨子案というのをご議論いただきたいというふうに思います。そして、5月の下旬には取りまとめるという形で、計4回、今後、3回、この懇談会を持ちたいというふうに思っ

ております。どうぞよろしくお願いいたします。

○北川座長 それでは、今日の懇談会はこれで閉じさせていただきますが、今後とも、また先生方、各委員の皆さん方のご意見を賜りますことをお願いを申し上げます、最後の御礼のご挨拶といたします。今日は本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

午後2時58分 閉会